

国仲砂川の壕

－ 南上原地区ほ場整備工事（H27-2）における発掘調査報告書 －

2017（平成29年）

宮古島市教育委員会

序

本報告書は、南上原地区ほ場整備工事（H27-2）に伴い宮古島市伊良部字国仲で新規に発見された国仲砂川の壕の発掘調査成果をまとめた報告書である。

沖縄戦時、伊良部島には、独立混成第 59 旅団が配備され、伊良部国民学校にその本部がおかれました。今回報告を行う国仲砂川の壕は、体験談や聞き取り調査から同旅団との関係性が高いと考えられます。調査の結果、同一形態をした壕が複数確認されており、榴弾砲を設置したことが推察されます。今回の調査は、伊良部島における旧日本軍の展開を考えるうえで、重要な成果がえられたものと存じます。

戦後 71 年が過ぎた現在においても、新たな壕が発見される事例も多く、これらの壕の発掘調査は、次世代に沖縄戦を物語る一つの資料であるといえます。伊良部島における戦争遺跡の調査事例は、まだ少ない状況にありますが、今回の調査事例も含め、同地域の沖縄戦時の状況を考える一つの契機になればと思います。

末尾になりましたが、今回の調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成 29(2017) 年

宮古島市教育委員会 教育長 宮國 博

例 言

1. 本報告書は、宮古島市農地整備課の実施する南上原地区ほ場整備工事（H27-2）に伴い、新規発見された国仲砂川の壕の記録・保存調査の成果をまとめた報告書である。発掘調査は、平成 28 年 8 月 8 日から 8 月 30 日までの期間で実施した。
2. 発掘調査は、宮古島市教育委員会が直営して行った。
3. 発掘調査については、沖縄県立埋蔵文化財センター山本正昭主任専門員に現場指導をいただき、聞き取り調査に関しては、宮古島市伊良部支所にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。
4. 本報告書内における ref. は国立公文書館アジア歴史資料センターのレファレンス番号を示すものである。
5. 伊良部国民学校沿革誌は、宮古島市史編さん室に収蔵されている資料を利用した。
6. 本報告書は、久貝弥嗣が中心となり、菱木勇一ほかの協力を得て編集を行った。報告書の執筆は、以下のとおりである。
第 2 章 第 2 節 山口直美。その他は、久貝弥嗣が執筆した。
7. 発掘調査で得られた遺物、実測図、写真等の資料は、宮古島市教育委員会にて保管している。

目 次

序

例言

第1章 経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
1. 伊良部地区における旧日本軍の展開	4
2. 周辺の戦争遺跡及び関連記念碑	5
3. 聞き取り調査	7
4. 体験談	7
付録．伊良部国民学校沿革誌にみる戦時下の記録	9
第3章 報告	13
第1節 壕1	13
第2節 壕2	18
第3節 壕3	21
第4節 壕4	24
第4章 まとめ	29
参考文献	31

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図①	2	第 7 図 壕内の抗木利用模式図（宮古島市教育委員会）	15
第 2 図 遺跡位置図①	3	第 8 図 壕 2 平面図・断面図（S=1/150）	18
第 3 図 宮古島地区防禦配備図（瀬名波 1975 年）	5	第 9 図 鉄製品（4/5）	19
第 4 図 国仲砂川の壕周辺の戦争遺跡及び関連地	6	第 10 図 壕 3 平面図・断面図（S=1/150）	21
第 5 図 各壕位置図	13	第 11 図 壕 4 平面図・断面図（S=1/150）	25
第 6 図 壕 1 平面図・断面図（S=1/150）	14	第 12 図 壕 1、2、3、4 における 96 式 15 榴弾砲配置模式図	30

図 版 目 次

図版 1 忠魂碑	11	図版 14 壕 3・壕口	22
図版 2 慰霊之碑	11	図版 15 壕 3・壕内部より壕口をのぞむ	22
図版 3 国仲上原の壕・近景	12	図版 16 壕 3・壕内の最奥部	23
図版 4 国仲上原の壕・壕内部	12	図版 17 壕 3・壕口近く残る柱跡	23
図版 5 壕 1・北側の壕口	15	図版 18 壕 4・壕口（伐採作業時）	24
図版 6 壕 1・南側の壕口	16	図版 19 壕 4・壕内部（壕口付近）	26
図版 7 壕 1・北側の壕口より内部をのぞむ	16	図版 20 壕 4・壕内部（奥側）	26
図版 8 壕 1・壕内部より南側の壕口をのぞむ	17	図版 21 壕 4・東側壁面（壕口側）	27
図版 9 壕 1・北側の壕口部分の柱跡	17	図版 22 壕 4・東側壁面（奥側）	27
図版 10 鉄製品（S=4/5）	19	図版 23 壕 4・西側壁面に残る掘削部分	28
図版 11 壕 2・壕口	19	図版 24 壕 4・壕掘削時のノミ痕	28
図版 12 壕 2・壕内部	20	図版 25 96 式 15 榴弾砲（西原町中央公民館展示）	30
図版 13 壕 2・遺物散布状況（鉄製品）	20		

第1章 経 過

第1節 調査に至る経緯

国仲砂川の壕は、宮古島市農地整備課が実施する南上原地区の農山漁村活性化対策整備事業で新規に発見された戦争遺跡である。壕は、平成28年6月10日から24日にかけて、宮古島市伊良部字国仲294-1、299、309-3の地番内において、総計4基が発見され、宮古島市教育委員会生涯学習振興課文化財係が現場で立ち合いを行い、旧日本軍に関連した壕であることが確認された。これを受けて、平成28年6月27日付宮農整第364号にて、宮古島市より沖縄県教育委員会教育長宛に文化財保護法第97条第1項の規定による遺跡発見の通知が、宮古島市教育委員会に進達依頼された。宮古島市教育委員会では、平成28年7月14日付宮教生第669号にて沖縄県教育委員会教育長宛に進達し、平成28年7月22日付教文第689号にて沖縄県教育委員会教育長より宮古島市教育委員会教育長宛に回答がだされた。本回答は、平成28年7月29日付宮教生第784号にて、宮古島市教育委員会教育長より宮古島市長下地敏彦へ伝達が行われた。遺跡名については、壕の確認された大字、小字の名称をとって国仲砂川の壕とした。

これらの遺跡発見の通知と回答をうけて、宮古島市教育委員会生涯学習振興課と農地整備課との間で、発掘調査の方法や費用について協議が行われ、発掘調査に関しては、壕の残存状況なども勘案し、平面図、断面図などの測量調査及び写真撮影で記録保存することとした。

宮古島市教育委員会では、平成28年8月8日から19日までの期間で、壕の測量調査等を実施した。調査期間中の8月22日には、沖縄県立埋蔵文化財センターの山本正昭主任専門員による現地指導も行われ、各壕の機能や調査方法などについてご指導いただいた。調査終了後は、伊良部支所の協力を得て、聞き取り調査を実施した。また併せて現場の測量図面などの整理、トレース作業など、報告書作成のための編集作業を行い、報告書の発刊にいたった。

第2節 調査体制

本調査を行った平成28年度の調査体制は以下のとおりである。

事業主体 宮古島市教育委員会 教育長 宮國 博

事業所管 生涯学習部 部 長 上地 栄作

事業総括 生涯学習振興課 課 長 下地 悟

文化財係 係 長 砂辺 和正

事業事務 生涯学習振興課 文化財係 主 事 久貝 春陽

調査担当 生涯学習振興課 文化財係 主 事 久貝 弥嗣

調査補助 生涯学習振興課 文化財係 嘱 託 川満 広紀

臨時職員 菱木 勇一、山口 直美

川満未来、西里咲子、森谷大介

文化財資料室作業員

草浦 昌子、平安山 恵利香

幸地ちはる、下地久美子、砂川幸子、高橋美智代、山里智子

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

国仲砂川の壕の位置する伊良部島は、隣接する下地島も含めた旧伊良部町の行政単位を構成していたが、2005年10月1日に、旧平良市、旧下地町、旧上野村、旧城辺町が合併し、現在の宮古島市となった。伊良部島は池間添、前里添、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部の7つの大字からなり、前2字をあわせて佐良浜（北区）、後5字をあわせて伊良部（南区）と称される。

伊良部島は、島の面積が28.3㎢を有し、宮古島市内では、宮古島について2番目に面積の大きな島である。伊良部地区の人口は、5,312人（2016年9月時点『広報みやこじま』No.133より）で、宮古島市内全体の人口の1割ほどである。伊良部島は、宮古島の西に位置しており、2015年に全長3,540m（主橋部分）の伊良部大橋が開通したことにより、島への観光客も増加傾向にある。伊良部島の西には下地島が入り江を隔てて位置しており、現在2つの島は5つの橋で結ばれている。伊良部島は、島全体が琉球石灰岩からなり、島の最高標高地点は、標高88mの牧山にある。島の周辺海域の大部分に、礁嶺の発達したサンゴ礁海域が広がり、佐和田の浜は渚100選にも選定される風光明媚な海岸線である。

国仲集落は、佐和田・長浜と、伊良部・仲地の2つの集落にはさまれるように位置しており、古くは旧伊良部国民学校がおかれ、現在では伊良部小・中学校がおかれている。国仲砂川の壕は、この国仲集落の東方400m～600mの場所に位置する小丘陵地の裾部や中腹部の琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。



第1図 遺跡位置図①



第2図 遺跡位置図①

第2節 歴史的環境

1. 伊良部地区における旧日本軍の展開

沖縄戦時、伊良部地区においては、独立混成第59旅団、野戦重砲兵第1連隊第1大隊第1中隊、山砲兵第28連隊第1大隊第3中隊などの部隊が配備されていたことが確認される。以下、今回報告を行う国仲砂川の壕の位置する国仲一帯の各部隊の配備状況などについて整理を行っていきたい。

(1) 独立混成第59旅団

沖縄戦時、国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第59旅団（通称：碧部隊。以下、第59旅団）が、昭和19年9月14日より駐屯している（沿革誌より）。第59旅団は、昭和19年8月15日満州公主嶺で編成され、9月14日に伊良部島に到着している（ref. C12122494800）。第59旅団は、多賀哲四郎少将を旅団長とし、司令部136人、独立歩兵第393大隊601人、第394大隊592人、第395大隊600人、第396大隊602人、旅団砲兵隊371人、旅団工兵隊254人、旅団通信隊195人の総数3,351人から編成される（ref. C11110031400）^{（注1）}。第59旅団は上陸早々、伊良部国民学校校舎の職員室を除く17教室を旅団本部と通信隊の兵舎に転用している。移駐した部隊は、村内の要所に配備されて、村内の林には幕舎を設営し、10月頃から全島に渡っての陣地構築や弾薬庫、食糧庫の壕掘り作業が始まった。しかし、昭和20年6月2日に、兵力の分散を避けるため、平良への移動が下令されている。平良では添道地区に戦闘指令所を開設して狩俣方面までの守備にあたっている。

後述する付録にもあるように、沿革誌には、第59旅団が伊良部国民学校に駐屯している間に、講和や軍慰安の学芸会などを開催していることがみてとれる。しかし、昭和20年3月27日の空襲を受け、第59旅団の一部は、国民学校から移動し、翌28日には第59旅団の全てが国民学校から移動している。4月1日以降は、連日のように伊良部島が空襲を受けており、国民学校も4月3日には機銃掃射を受け、大きな被害を受けている。国民学校から移動した第59旅団は、ウルカー一帯の森に移動したとされる（体験談より）。ウルカーとは、現在の国仲に所在する小字の砂川に比定されるもので、今回壕が確認された小字と同一地域である。

(2) 野戦重砲兵第1連隊第1大隊第1中隊

野戦重砲兵第1連隊第1大隊は、昭和19年7月に宮古島に上陸し、当初は西城国民学校に本部を置いている。第1大隊の第1中隊は三上鎮男中尉を中隊長とし、伊良部島に配備された際には、第59旅団の隷下にはいり、96式15榴弾砲を2門有していたとされる（ref. C11110010000）^{（注2）}。第1中隊は、第59旅団が宮古島へ移動した後も、伊良部島にとどまったとされ、沿革誌では昭和20年7月14日に、佐和田の高等科児童が、三上隊の長山陣地構築作業に協力^{（注3）}、15日には仲地の高等科児童も長山陣地の構築作業に従事させられていたことが記されている。また戦史資料（ref. C11110010000）にも、8月上旬まで壕の構築を予定していたことが記載されていることから、同中隊は宮古島へ移動することがなかったと考えられる。

三上隊の構築していた長山の陣地壕とは、「牧山陣地壕」と考えられる。本壕は、牧山の急崖部に砲口を設け、96式15榴弾砲を壕内に設置して平良港一帯の守備の援護を目的としていたと推察されている。

(3) 山砲兵第28連隊第1大隊第3中隊

山砲兵第28連隊第1大隊第3中隊は、河村恒中尉を中隊長とし、伊良部地区隊として派遣され、第59旅団の隷下にはいっている（ref. C11110237800）。山砲兵第28連隊は、昭和19年8月12日に宮古島に上陸している。第3中隊がいつの時期に伊良部島へ渡ったのかは不明であるが、昭和20年6月上旬には伊良部地区隊の指揮を脱し、山砲兵第28連隊の連隊長の隷下に復帰していることが分かる。第3中隊が、伊良部島のどこで、どのような活動をしていたのかを伺い知ることのできる資料は確認されていない。

＜注釈＞

注1：各部隊の履歴（ref. C12122494800）を確認すると、独立歩兵第395大隊のみが、伊良部島への移動が確認されないため、同隊は伊良部島へ配備されなかったものと考えられる。

注2：第1中隊は榴弾砲を3門有していたが、平良町南岸に1門を残していったため、伊良部島へは2門を運び入れたと考えられる。

注3：沿革誌には、「字佐和田ノ高等科児童ハ三上隊長，山陣地構築作業協力ヲナス」と記されているが、読点が本来の意味での読点であるのか不明瞭であったため、本報告書では、「…（中略）三上隊長山陣地（中略）…」と読むものと考えた。

2. 周辺の戦争遺跡及び関連記念碑

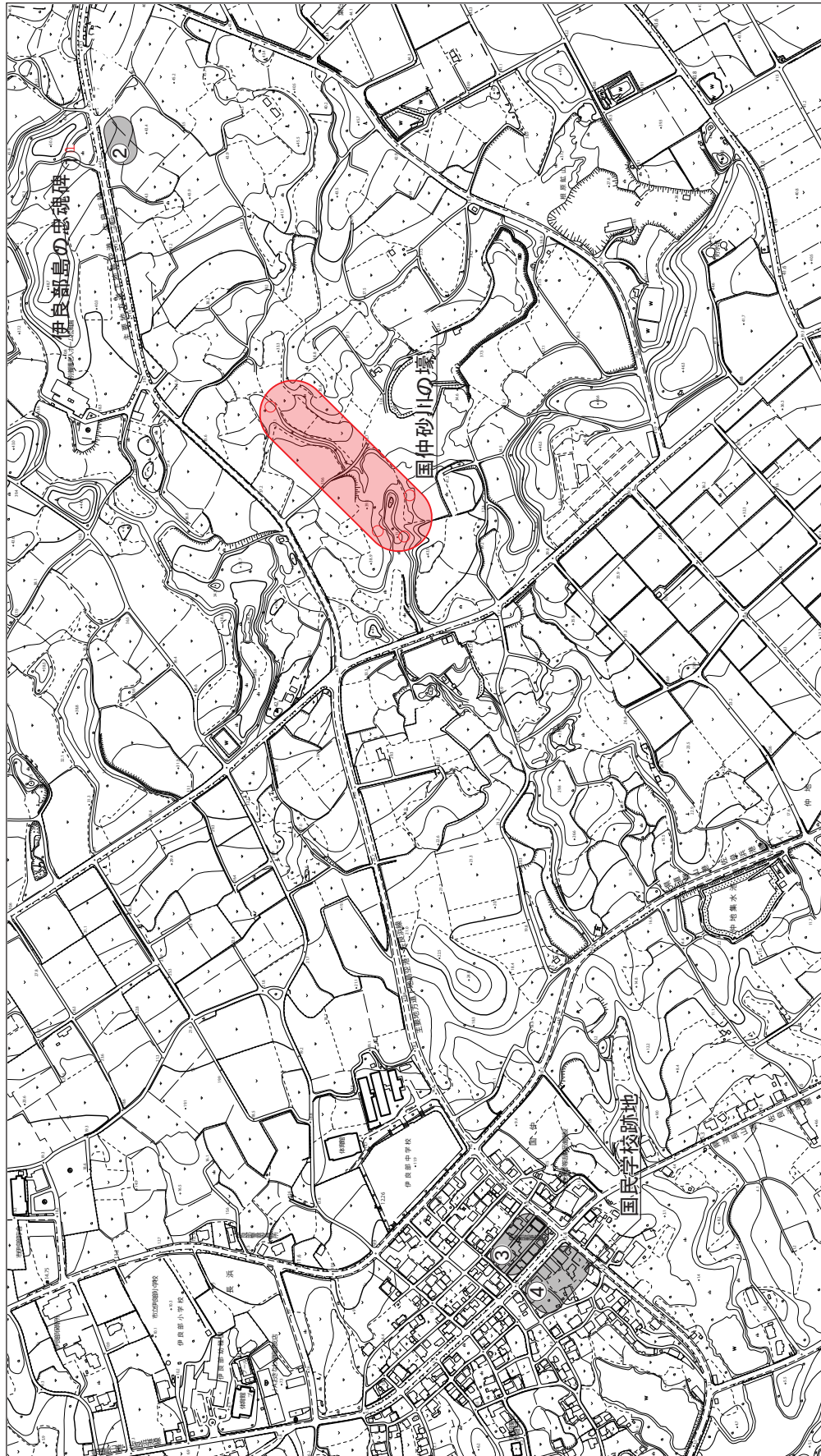
(1) 伊良部島の忠魂碑（図版1）

忠魂碑は、戊辰戦争（1868年）以後、各地に建立された招魂社（のち護国神社）ひいては靖国神社に結びつく、天皇のために宣した英霊を祀る記念碑である。1904～05年の日露戦争以後、全国各地で建立されるようになったが、宮古には伊良部のほかに、旧平良町（1924年建立）、旧城辺村（1927年建立）、旧下地村（1932年建立）の4ヶ所で建立された。いずれも当時の町村当局の音頭で一般に寄附を募り建立されたようである。15年戦争を通じて陸軍記念日（3月10日）、海軍記念日（5月27日）、あるいは大詔戴日（毎月8日）など、各種記念日には在郷軍人や青年団を中心に慰霊祭ならびに戦意高揚の各種催しがなされた。その際、児童生徒も参拝させられている。

伊良部島の忠魂碑は1914年に建立されており、宮古島市内でもっと古く、県内においても1912年に建立された旧佐敷村の忠魂碑について2番目に古い忠魂碑である。碑銘の揮毫者名は明記されていないが、当時の村長（国仲寛徒）であろうとされている。



第3図 宮古島地区防禦配備図（瀬名波 1975年）



①伊良部島の忠魂碑 ②伊良部の壕 ③伊良部国民学校 (校舎) 跡地 ④伊良部国民学校 (グラウンド) 跡地
第4図 国仲砂川の壕周辺の戦争遺跡及び関連地

(2) 牧山陣地壕

伊良部島の最高地点である牧山（標高 88m）の頂上近くの、標高 75m 付近に設置された陣地壕で、牧山展望台への遊歩道沿いに位置する。砲口からは、宮古島北部の西海岸を一望でき、平良港の防衛のために設置したと考えられる。本壕には、96 式 15 糎榴弾砲が格納、設置され、野戦重砲兵第 1 連隊第 1 大隊第 1 中隊に関連する壕と考えられる。

(3) 国仲上原の壕（図版 3、4）

本壕は、忠魂碑の道向かいに位置し、ほ場整備工事に伴い、2012 年 10 月に新発見された壕である。工事により壕口部分の天井は崩落していたが、残存する壕の幅は約 3m、高さ 2.8m、奥行き約 8.5m であった。比較的内部の広い壕である。人為的に掘り込んでおり、旧日本軍によって構築されたものと考えられ、特に近隣に駐屯していた独立混成第 59 旅団との関係性が深い壕と考えられる。

3. 聞き取り調査

国仲砂川の壕の性格を確認する上で、聞き取り調査を 1 件実施した。以下、その概要を記す。

(1) 国仲在・男性・88 歳（平成 28 年 8 月時点）

- ・国仲美里の一带で軍隊が壕を掘っていたとのことだが、部隊名については知らなかった。しかし、これらの壕の一つには、筒の長い大きな大砲（注 1）が設置されていたのをみた。
- ・この壕の構築に際しては、住民が従事されることはなく、兵隊が掘っており、住民は別の場所での壕の構築に従事していた。
- ・場所が定かではないが、国仲美里の一带には、偉い方々が赤瓦の家を作って住んでいた。

注 1：聞き取り時には、「じゅうだんほう」もしくは「りゅうだんほう」と発言されていた。

4. 体験談

(1) 『沖縄県史』（沖縄県教育委員会 1974 年）

『沖縄県史第 10 巻各論編 9 沖縄戦記録 2』（沖縄県教育委員会 1974）には、沖縄戦時の伊良部島での体験談が複数収録されている。以下、今回確認された壕と関わり深いと考えられる体験談について整理を行った。

①大川恵良（当時 37 歳） 伊良部字佐和田

- ・昭和 19 年 7 月頃、警察の指導で伊良部国民学校に添って防空壕を掘った。他、すべての校舎を偽装するために縄をない、建物にかけた。
- ・昭和 19 年 9 月頃、満州から 1 個旅団約 4,000 人が入ってきた。その他、山砲隊 1 個大隊 200 人程度が長山を中心に入ってきた。牧山にトンネルを掘り、砲身の大きさだけ大浦湾に向けて砲台が築かれた。およそ 800m のトンネル掘りに村人も毎日狩り出された。
- ・9～10 月に混成旅団が入り、学校接收。本部はのちに国仲部落の北方俗称ウルカの自然壕を中心に茅葺の家をつくって移り、旅団長もそこにいた。
- ・空襲が激しくなると、学校や部落内にいた軍はみんなウルカ一帯の森に移動。さらに部落の東側の御嶽あたりに軍用の防空壕を造る。この材料は校舎の床をはずし、雨戸をはぎ取って使用。壕は大人が立って歩けるほどの大きさであった。
- ・校区は 3 つに分担。東（伊良部・仲地）は伊良部部落の石粉をとった大きな横穴を避難壕として使用。中央（国仲）は講堂の一部を御真影奉護のために使用。西（佐和田・長浜）。
- ・軍は各部落に対して食糧の供出を強要。佐和田の製塩所に圧力をかけた。軍への協力は大人のみならず児童生徒にまで及んだ。食糧を補うための野草とり、馬の飼料の刈り取り。

- ・佐和田の浜の大岩の一つ一つも誰それが潜んで敵戦車がきたら手榴弾を持って突っ込むということも決めてあった。
- ・下地島の西から白鳥崎までの海岸線に防塁を築いた。高さ8尺、幅1間半、長さ2km。
- ・昭和20年4月の空襲は被害甚大。学校では北側の校舎が真二つに切れ、3人の死者がでた。東区では防空壕に直撃弾を受け子供を含む一家が全滅。
- ・かんじんの伊良部にいる軍は敵機がどんなにせめてきても反撃しなかった。
- ・僕の家は4部屋のうち2部屋を兵隊に貸した。田中という隊長^(注1)、中尉、下士官2人、兵卒2人の6人だった。注1：田中大尉。独立混成第59旅団第393大隊田中正行か？

②栗国良教（当時34歳） 伊良部国仲

- ・軍の経理部に呼ばれて牛の徴発係をさせられた。
- ・軍は国仲森（現在の伊良部中学校後方）のところの美里嶺を中心に横穴式の防空壕を掘ってあった。徴発係に任命されたときは、まだ軍の本部は国民学校にあったが、その後、本部は美里嶺の防空壕に移った。
- ・部落の人は自分の食べ物にも困っているのに、軍の命令で供出。半年くらいするともう部落からは供出するのがなかった。空襲の激しくなった昭和20年3～4月頃は真夜中に部落から部隊まで飲料水を運んだ。
- ・国仲と佐良浜のちょうど真ん中あたりにコロコ嶺というところにいる部隊に飲料水を運んだ。
- ・軍の防空壕掘りは美里嶺で2日間くらいやった。各部落に人数をわりあてて下地島に戦車壕を掘らした。殆どの壕は民間人が掘った。

③儀保正吉（当時19歳） 伊良部池間添

- ・旅団が来て 佐良浜の住民は戦車壕を掘らされた。
- ・佐良浜国民学校には軍病院があった。
- ・佐良浜の婦人は佐良浜の船着場からトラックの通る平坦なところまでリレー式に砲弾運びをやらされた。
- ・昭和19年の6～7月頃は下地村皆愛の陸軍飛行場工事の為、青年学校の生徒4～50人をつれてった。10日間の約束が30日に延びた。
- ・私は昭和20年3月に召集され、5656部隊^(注2)のトラック隊に配属。専ら陣地構築、タコツボ掘りばかりだった。入隊した頃は瓦原の青年会場で、後ろの小高い丘にいた。注2：輜重兵第28連隊

④仲間重雄（当時45歳） 伊良部池間添

- ・飛行場工事の為、各字から割り当てで100人くらい徴用し、監督として3ヵ月作業した。飛行場では滑走路をならしたり、弾薬庫をつくったりタコツボ壕を掘ったりした。
- ・佐良浜の人は長山方面やヤラブザキ方面に戦車壕を掘ったり、戦車を止める障害物（松林の松を真ん中あたりから切って戦車の進行を止める）をつくった。作業には各戸から必ず一人出さねばならなかった。
- ・碧部隊の漁撈班もさせられ、毎日サバニで軍用の魚とりに行った。
- ・佐良浜～平良間の運搬船をめがけて機銃掃射があった。

(2) 伊良部村史（昭和53年4月1日発行）

- ・独立混成第59旅団（碧部隊）は昭和19年8月15日満州公主嶺で編成され、9月14日伊良部島に来駐。上陸早々、伊良部国民学校校舎の職員室を除く17教室を旅団本部と通信隊の兵舎に転用。佐良浜国民学校校舎は野戦病院として転用。移駐した部隊は村内の要所要所に配備されて、森や林で幕舎の設営にとりかかり、10月頃から全島にわたっての陣地構築や弾薬庫、食糧庫の壕掘作業が始まった。
- ・昭和19年9月上旬上陸以来、伊良部、下地両島に展開布陣して敵来攻に備え、とくに上陸地点と目される牧山高地には、15cm榴弾砲を配置して防備を固めたが、昭和20年6月2日、兵力の分散を避けるため、平良への移動が下令。添道地区に戦闘指令所を開設して狩俣方面までの守備にあたった。

付録：伊良部国民学校沿革誌（明治 19 年 11 月 27 日創立）にみる戦時下の記録

<昭和 19 年>

- ・ 9 月 14 日：軍部、本日より学校に宿泊す 本日より職員室東の教室の外は全部疎開さる。
- ・ 9 月 16 日：各字に民家を借用し教室となす。午後よりその整理。
- ・ 9 月 18 日：学童集団疎開を奨励す。
- ・ 9 月 30 日：今村見習士官より 職員に対して衛生講和あり。
- ・ 10 月 2 日：軍人援護強調週間に於ける行事の決定。
- ・ 10 月 5 日：軍人援護強調週間 戦没軍人家庭へ堆肥を以って慰問す。
- ・ 10 月 7 日：戦勝祈願祭
- ・ 10 月 10 日：午前 7 時 30 分空襲警報発令。午前 8 時、午後 1 時空襲あり。午後 8 時警報解除
- ・ 10 月 16 日：全職員午後 3 時登校、御真影奉護所の壕を掘る。
- ・ 10 月 20 日：本日より学童草刈（村内の山砲隊へ）
- ・ 10 月 30 日：各部落に於いて教育に関する勅語奉読式举行
- ・ 10 月 31 日：学校御奉載の御真影を宮古郡御真影奉遷所へ奉遷す。
- ・ 11 月 27 日：全校児童は「木の実（クロンギの実）」を採集し軍部に納入す。
- ・ 12 月 8 日：各学級で大詔奉載日記念式举行。軍慰安の学芸会開く。
- ・ 12 月 28 日：全校児童ヤラブの実を割り軍部に供出す。

<昭和 20 年>

- ・ 1 月 1 日：遥拝式举行
- ・ 1 月 12 日：故大舛大尉の記念講和をなす。
- ・ 3 月 1 日：午前 7 時、午後 4 時半頃空襲ありたるも、校舎に異常なし、職員児童異常なし。
- ・ 3 月 27 日：空襲あり。軍部の一部は当校より移転。
- ・ 3 月 28 日：本日軍部は当校より全部移転す。
- ・ 3 月 31 日：野瀬曹長より毒瓦斯に対する吸収罐制作に対する講和あり。
- ・ 4 月 1 日：初等科 5 年以上は各字の部落民と共に海岸防護用の防塁を築く。空襲警報発令中にして空襲ありたるも被害を受けず。初等科 4 年以下児童、入学式並びに始業式を举行なるも空襲甚だしく举行困難となり無期延期となる。
- ・ 4 月 2 日：空襲警報発令中にして終日空襲ありたるも被害なし。初等科 4 年以下は空襲警報発令中で授業行われず。
- ・ 4 月 3 日：終日空襲あり。午前中は機関銃掃射の為、校舎は各教室に凡そ 7.8 か所の弾痕あり。尚運動場（東と中に）約 1 m 置きに 1 個あての弾痕あり。午後は爆弾投下され（学校西と北）爆風の為硝子は殆ど全面的に破壊さる。尚押入れの図書箱、其他の物品消耗品多大の損害あり。
- ・ 4 月 4 日：終日空襲ありたるも被害なし。午後 6 時全職員登校して小梨中尉（注 1）より弾の性能に付き講和あり。 注 1：小梨（貞三）中尉（独立混成第 59 旅団本部副官）
- ・ 4 月 5 日：終日空襲ありたるも被害なし。
- ・ 4 月 6 日：終日空襲ありたるも被害なし。
- ・ 4 月 7 日：終日空襲ありたるも被害あり。校舎各教室に約 5.6 個宛弾痕あり。運動場には 1 m 置き位に弾痕ありたり。
- ・ 4 月 8 日：終日空襲ありたるも被害なし。

- ・4月9日：空襲あり。初等科4年以下は授業行わず。
- ・4月10日：防塁作業は中止し各字民と共に食糧増産をなす。空襲あるも被害なし。
- ・4月11日：防塁作業は中止し各字民と共に食糧増産をなす。空襲あるも被害なし。
- ・4月12日：職員並びに初5以上は防塁作業をなし初4以下は授業行わず。空襲警報発令中。野戦病院本日より教室を使用す。
- ・5月2日：一昨日の豪雨の為防空壕に待避しておきし非常用持出箱（重要書類、教科書、半紙）一切に浸水し使用たえざるものあり。
- ・5月17日：終日空襲ありて（校舎にロケット砲2発落下して教室に多少損害受けたり）
- ・6月17日：平良町より当村へ疎開民の誘導の為全職員は高等科生を引率して佐良浜へ。午後8時半、佐良浜港へ着、直ちに疎開者の手荷物を運びながら一人で一家族の者を疎開者の住むべき家まで誘導す。終了時刻は午前2時、疎開者は全員感激涙にいっぱいです。
- ・6月19日：疎開者誘導の為佐良浜へ。
- ・7月14日：字佐和田の高等科児童は三上隊長（注2） 山陣地構築作業協力なす。他字の児童及び初3以上は堆肥原料蒐集 注2：三上隊長。野重第1連隊第1大隊第1中隊長
- ・7月15日：仲地高等科児童は長山陣地作業。
- ・7月24日：初1より高等科までの全児童はバッタを捕り軍部へ供出
- ・7月27日：初4以上熟せるアダンの実を採集して軍部へ供出。
- ・8月14日：全児童野草採集し軍部へ供出
- ・8月30日：御真影奉遷所に於いて勅語・詔書奉焼式を挙行す。
- ・9月6日：本日より校舎修理を開始す。
- ・9月9日：午後5時より碧部隊竹内部隊主催の戦没将士の合同慰霊祭を学校記念運動場に於いて挙行す。
高等科児童、全職員参列
- ・11月5日：軍部校舎修繕を開始す。



図版1 忠魂碑

* 右は裏に記された忠魂碑の建立年月日



図版2 慰霊之碑



図版 3 国仲上原の壕・近景



図版 4 国仲上原の壕・壕内部

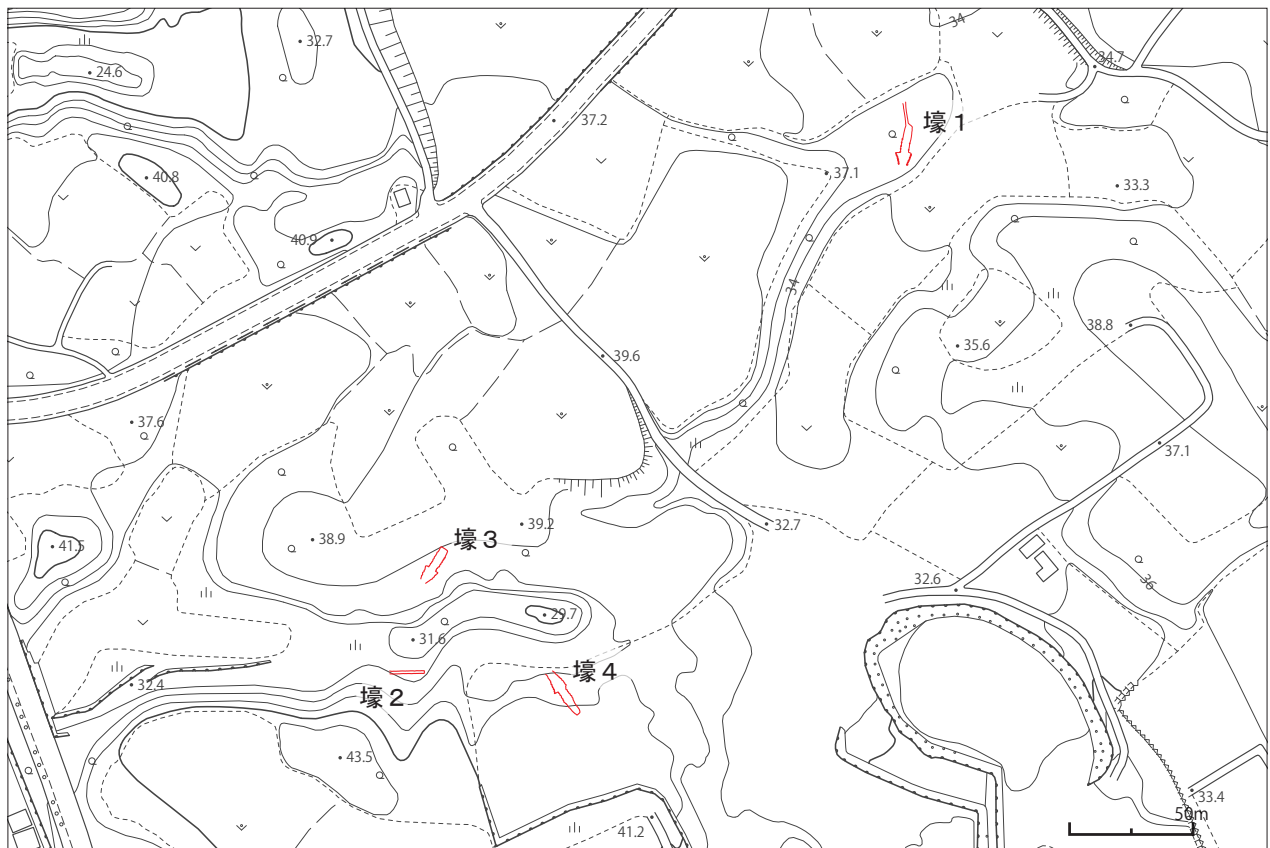
第3章 報告

壕は全体で4基確認され、いずれも琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。壕2～4は、比較的近接しているのに対し、壕1は、これらの壕から北東方向に直線で約230mはなれた場所に位置している。いずれの壕も、周辺の道路から低い場所に位置しており、複数の小さな丘陵地が点在する丘陵間の中腹部分に壕が掘り込まれている。形態的に壕1、3、4は類似しているが、それぞれの壕口の開く方向は、南南西（壕1）、南西（壕3）、北西（壕4）と規則的ではない。以下、各壕の形態について記す。

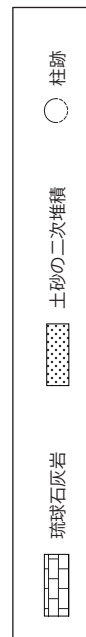
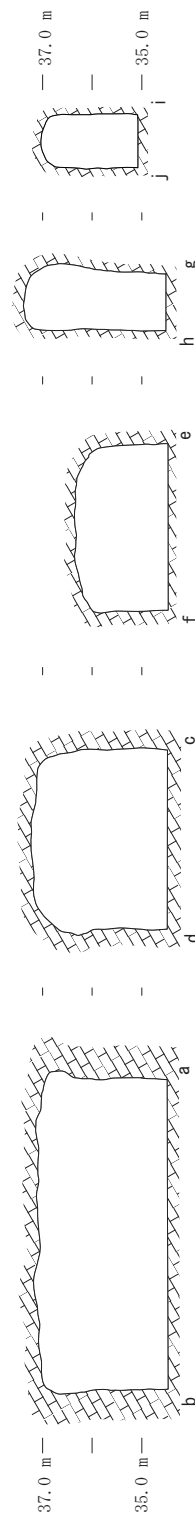
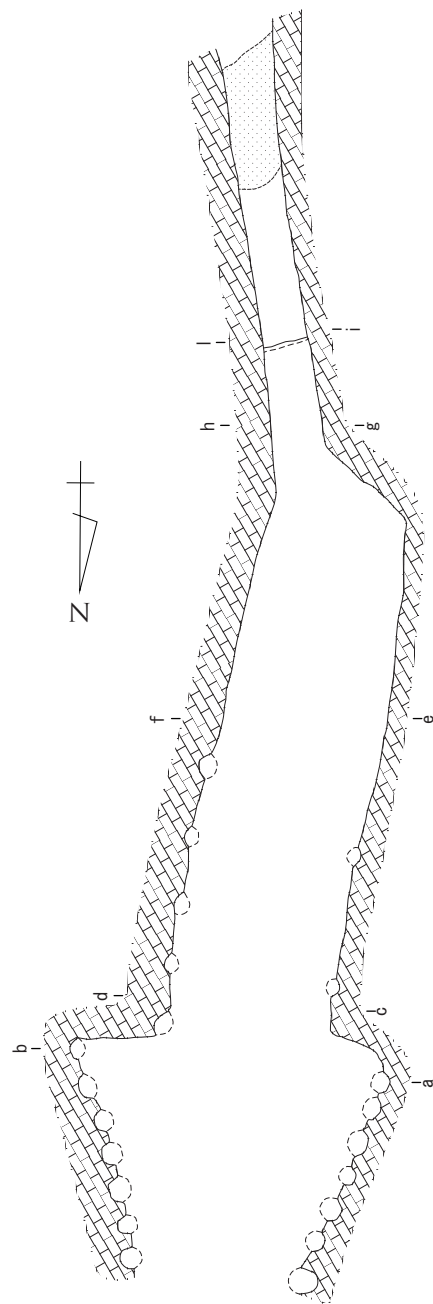
第1節 壕1

壕1は、南北に2つの壕口を有している。北側の壕口は、地下へ下るようにして掘り込まれており、現在の地表からの高低差は約2.5mである。北側の壕口部分には、周辺からの土砂の流入が多く見られる。北側の壕口の幅は3.0m、残存高は2.0mと比較的広い。この北側の壕口部分の平面形態は、フラスコ状を呈し、最大幅は6.4mに達し、非常に特徴的な形態をなしている。そして、壁面は柱を設置することを目的に半月型に掘り込まれ、蛇腹状の形態を呈しており、両壁面ともに7本の柱穴が構築されたと考えられる。また、柱間の幅は、約20～50cmと非常に密である。しかしながら、この地域の琉球石灰岩の性質によると思われるが、その半円型の掘り込みの形態は粗雑である。

北側の壕口から約5.2mほど進むと、壕の幅は3.5mに縮小し、そのままの幅で南へ直進する。この範囲においても、両壁面に柱の設置との関連性が考えられる半月状の掘り込みが行われている。しかし、東側の壁面では、その掘り込みが5つ確認できるのに対し、西側の壁面で2つしか確認されていない。また、その掘り込みの構



第5図 各壕位置図



第6図 壕I平面図・断面図 (S=1/150)

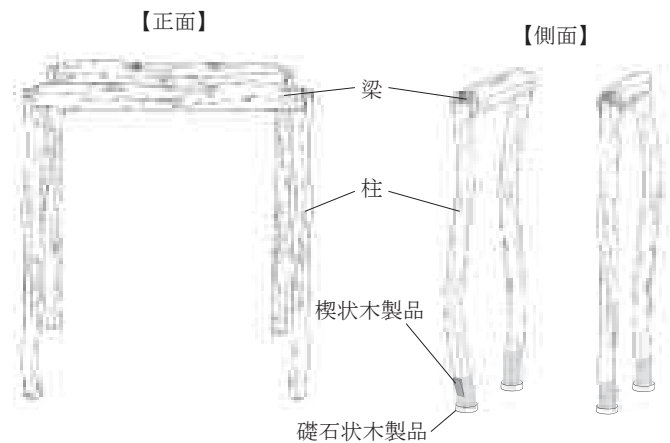
造も北側壕口部分と同様に粗雑である。

北側の壕口から南へ約 16.5m の段階になると、さらに壕の幅は 1.0m に縮小し、人一人が歩いて通れるほどの幅になる。そして、約 8.9m ほど南へ直進して、南側の壕口部へといたる。途中、約 70cm の段差を有しており、南側の壕口から北に 6.6m の範囲では、高さが約 1.5 ～ 1.7m とやや腰をかがめた状態で歩くこととなる。

南側の壕口は、幅 1.3m、高さ 1.2m と北側の壕口に比べて小さく、人が出入りすることを目的に構築されたものと考えられる。南側の壕口も、北へ向かうに従い、緩やかな傾斜をもって構築されている。そのため、傾斜の角度に違いはあるものの、南北の両壕口から、それぞれ地下へ下るようにして壕が構築されるという構造になる。発見時には、南側の壕口部分にゴミ類が非常に多く散乱していた。このように、壕口を 2 つもつ構造の壕は、本調査地内では、この壕 1 にのみ見られるものである。

壕の断面形は、長方形を基本としているが、壕内の基盤となる琉球石灰岩が脆い部分においては、崩落している場所も複数確認された。壕内の床面には、土砂が比較的厚く 2 次堆積している状況が確認できる。

なお、宮古島市内において、壕内を柱や梁などの坑木で補強した事例として、長南陣地壕の事例があげられる（第 7 図参照）。



第 7 図 壕内の坑木利用模式図（宮古島市教育委員会 2015）



図版 5 壕 1・北側の壕口



図版 6 壕 1・南側の壕口



図版 7 壕 1・北側の壕口より内部をのぞむ



図版 8 壕 1・壕内部より南側の壕口をのぞむ



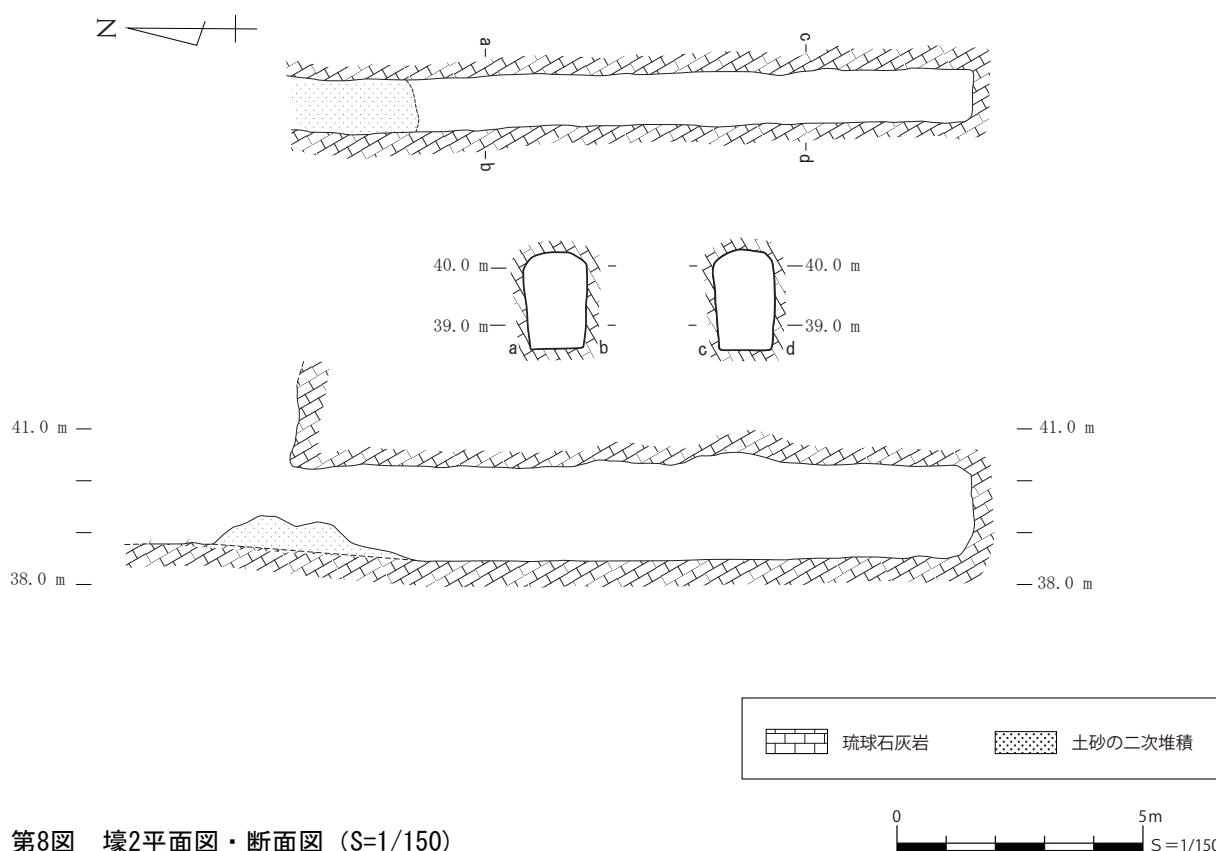
図版 9 壕 1・北側の壕口部分の柱跡

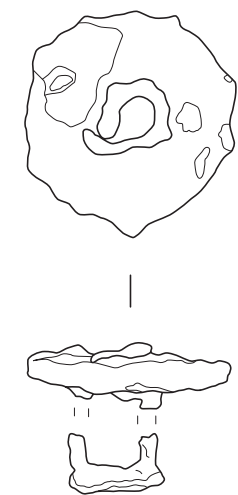
第2節 壕2

壕2は、標高約39mの小丘陵の下部に位置する壕で、サトウキビ畑が隣接する。壕2は、平面形態が南北方向に直線的にのびる壕で、全長は13.9mである。壕の高さは約2.0～2.1mで、人が立って歩けるほどの高さを有しているものの、幅は平均して約1.0～1.1mで、なんとか人がすれ違うことができるほどの幅である。壕の断面形態は、床面部分が約1mであるが、天井部近くは、約1.2mで最大幅を有し馬蹄形の形態をなす。壕の壁面には、1ヶ所灯り取りと思われる窪みと黒く変色した部分が確認された。本壕は、その他の3つの壕とは形態的にも異なり、単純化された造りである。その用途としては、その他の壕を利用時の緊急避難を目的とした壕と推察される。

壕の最奥部付近には、小型の鉄製品が3点確認され（第9図、図版10）、そのうち2点を図化した。4つの壕において、遺物が確認されたのは、この3点のみである、

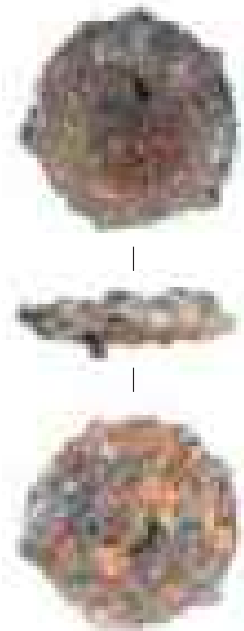
図版10-1は、直径3.4cmの円盤状の形態をなし、厚さは3mmほどと薄い。片面には、つまみ状突起が本来でいていたと考えられるが、現在では、それが潰れた状態にある。また、一面には、突起が貫通し釘状に突き出ている。この突起は、後述する図版10-2と接合すると考えられる。また今回は図化しなかったもう1点も、本製品と同様の製品である。10-2は、本来円形の形態をなしていたと考えられるが、一部欠損している。10-1と接合するように2本の棒状の突起が6～7mmほど出ている。3点とも、表面部は錆が付着しているが、いずれも関連する製品であると考えられる。しかしながら、今回はこれらの製品の用途を特定するにはいたらなかった。





図版 の1と2の復元

第9図 鉄製品 (4/5)



1



2



1と2の復元

図版10 鉄製品 (4/5)



図版11 壕2・壕口



図版 12 壕 2・壕内部



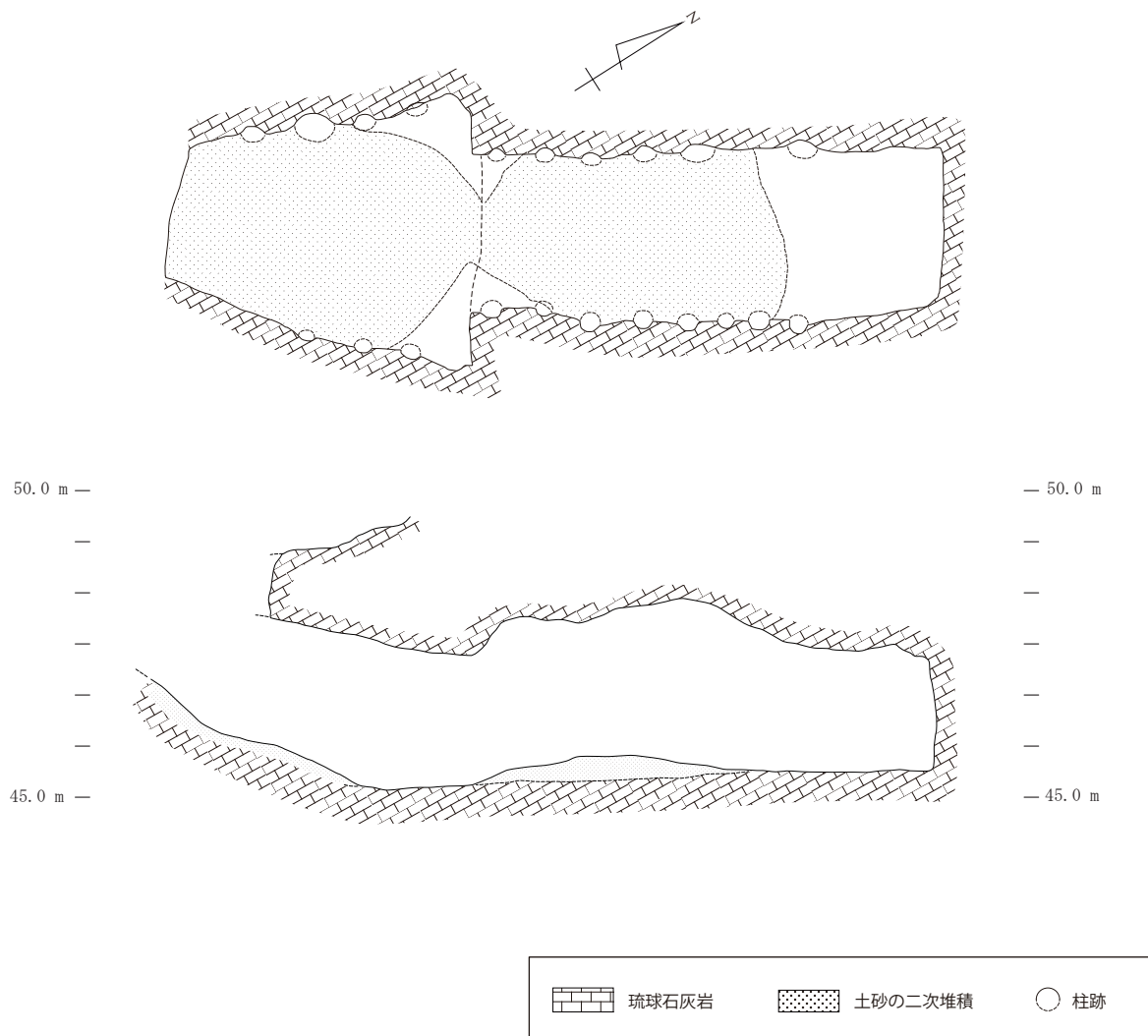
図版 13 壕 2・遺物散布状況（鉄製品）

第3節 壕3

壕3は、標高45～48mの小丘陵の下部に位置している。

壕3は、南西方向に壕口を有し、南西－北東を軸とする壕である。壕口は、入口部分の幅が約3.0mなのに対し、ハの字型に開いた最大幅は約5.7mで、壕1と同様にフラスコ状の形態をなしている。両壁面は、柱の設置との関連性が考えられる半月状の掘り込みを有している。概ね、両側面の掘り込みには対応関係がみられるが、北西部の壁面では4ヶ所、南東部の壁面では3ヶ所が確認され、南東部の壁面では最も入口に近い部分の掘り込みが確認されなかった。

壕口から約8.6m進んだ段階で、幅は約3.2mに縮小し、その幅のまま直進する。この範囲においても、両壁面には半月状の掘り込みが確認される。入口部分と同様に、概ね対応関係が認められるが、北西部の壁面で6ヶ所なのに対し、南東部の壁面では8ヶ所が確認される。また、いずれの掘り込みも粗雑である。



第10図 壕3平面図・断面図 (S=1/150)



図版 14 壕 3・壕口



図版 15 壕 3・壕内部より壕口をのぞむ



図版 16 壕 3・壕内の最奥部



図版 17 壕 3・壕口近く残る柱跡

第4節 壕4

壕4は、標高23～25mの小丘陵の中腹部分に位置している。壕の前面部は石灰岩を掘り込んで開けた状態になっている。調査時には、この壕口部分には多量の土砂が流入していた。

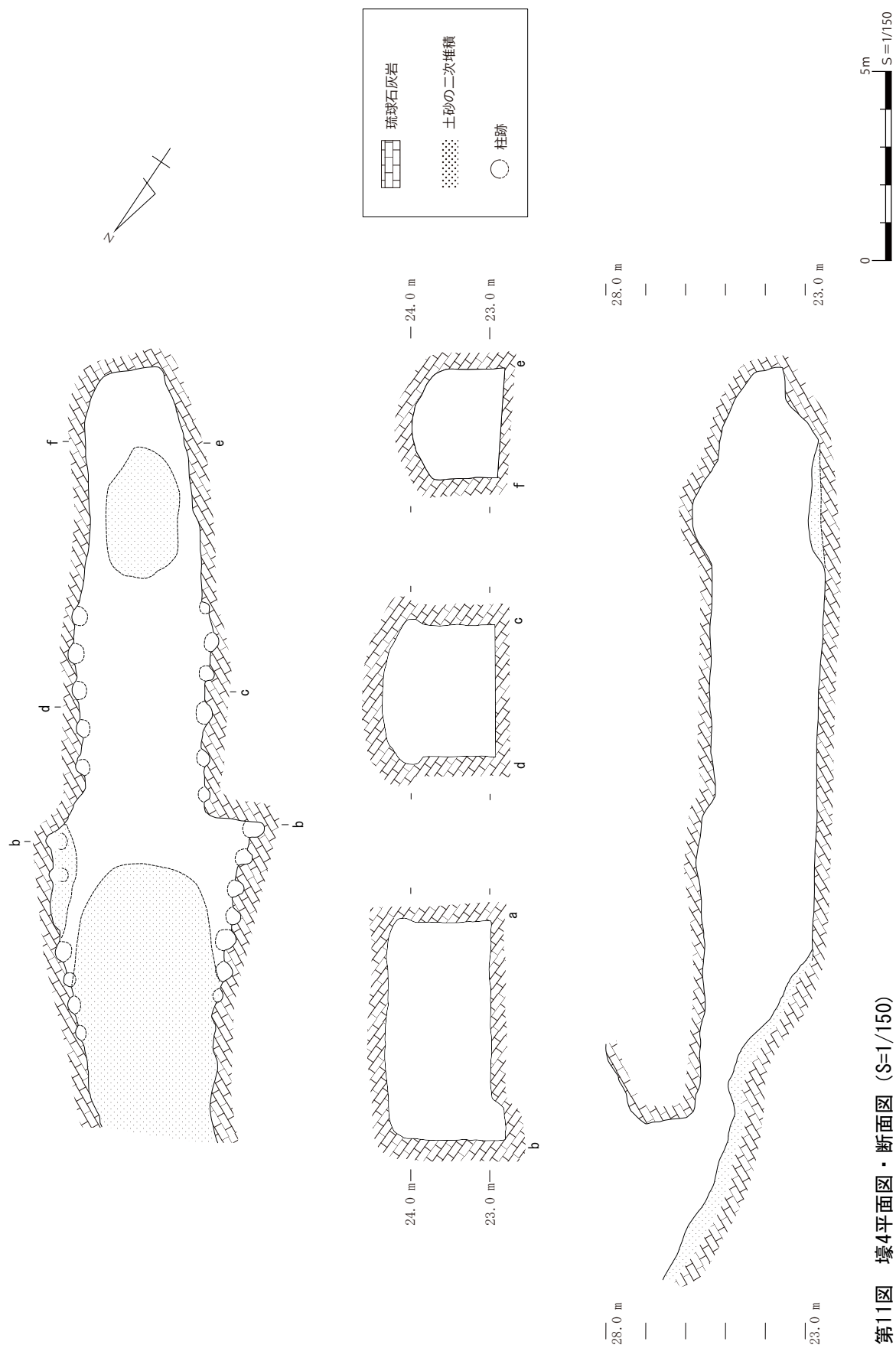
壕4は、北西方向に壕口を有し、北西－南東方向を軸とする壕である。現在の地表面より地下へむかって掘り込まれており、地表部から壕の床面までの高低差は、約3.5mを有する。壕口部分は、壕1、3と同様にフラスコ状の形態を呈している。入口部分の幅は2.7m、高さ2.5m。南へ6.2m直進するまでハの字型に幅が広がり、最大幅は5.7mに達する。しかしながら、最大幅を有する地点において、東側の壁面の肩が崩れており、その部分には直径約0.8m、深さ約0.3mの掘り込みが確認される。この部分は、人為的に掘り込まれたものである。

壕口部分の壁面には、東側で6ヶ所、西側で7ヶ所の半月状の掘り込みがなされている。掘り込みは、粗雑なつくりであるが、壕1、3と比すると比較的丁寧である。奥側の壁面でも、東側で5ヶ所、西側で6ヶ所の半月状の掘り込みがなされている。壕口部分同様に比較的丁寧なつくりであり、上部は一定の高さで横位に掘り込まれている。そのため、断面形は、若干東西方向に膨らみ、キノコ型を呈している。この膨らみについては、柱の上部において東西に渡す梁の他に、南北に柱間を渡す梁があった可能性を推察させる。

壕の最奥部は一段の段差を有している。また、1ヶ所のみであるが、壕構築時のノミ痕と考えられる縦位の線状の傷が複数確認できる（図版24）。壕内からの遺物の出土はなかった。



図版18 壕4・壕口（伐採作業時）



第11図 壕4平面図・断面図 (S=1/150)



図版 19 壕 4・壕内部〔壕口付近〕



図版 20 壕 4・壕内部（奥側）



図版 21 壕 4・東側壁面（壕口側）



図版 22 壕 4・東側壁面（奥側）



図版 23 壕 4・西側壁面に残る掘削部分



図版 24 壕 4・壕掘削時のノミ痕

第4章 まとめ

今回報告を行った国仲砂川の壕は、国仲集落の西方400～600mの場所に位置し、点在する小規模な丘陵の裾部や中腹部を掘り込んで構築されており、総計4基の壕で構成される。今回の報告において特筆すべきは、4基の壕の内の3基が類似した形態をなし、聞き取り調査や戦史資料などから独立混成第59旅団（以下、第59旅団）に関連する壕であることが確認されたことにある。

類似する3基の壕の形態は、壕口部分において、壕口の幅が2.7～3.0mなのに対し、奥に進むにつれその壕幅が広くなるハの字形の形態をなし、そこから壕口の幅が約3.2mにせばまって直線的にのびる壕の形態をなしている。そのため平面形態は、矢印のような形態をなしている。断面でみると、壕口のハの字型をなす部分は、現在の地表部から約3mほど地下へゆるやかに下りながら構築され、直線部分はフラットになる。壕1のみ、この直線部分から、通行を目的としたと考えられる通路がもう一つの壕口へとさらにつながっている。各壕の壁面には、柱の設置を目的としたと考えられる半月状のくぼみが蛇腹状に掘り込まれている。これらの掘り込みは、それぞれの間隔が1m未満と非常に密に作られている。また、蛇腹部分も含めた壁面の表面は、石灰岩の凹凸が著しく粗雑な造りの感をうける。このような蛇腹状の形態は、柱の設置を目的に構築されていると考えられるが、他の壕の状況を見ると、柱間の距離は2m前後で、本壕の距離間は非常に密に設置されているといえる。しかし本壕においては、縦列の柱の上部にも梁を設置したことをうかがわせるような掘り込みも確認されており、従来事例には見られない形態もみてとれる。なお、いずれの壕においても遺物の出土はみられなかった。

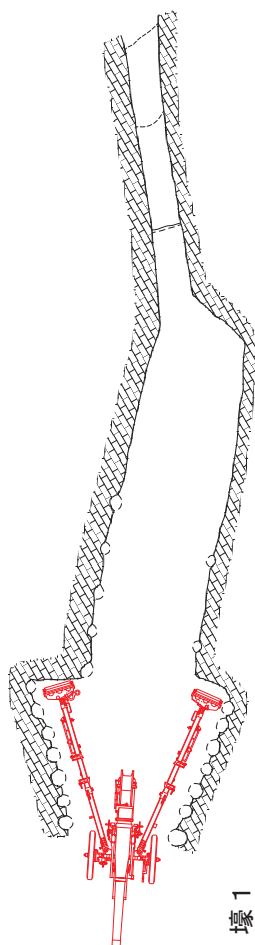
聞き取り調査では、今回壕が確認された場所一帯で、榴弾砲1基が設置されていたのを目撃したとの情報が得られている。戦史資料や沿革誌などから、国仲集落内の伊良部国民学校には、第59旅団が駐屯していたことが確認される。第59旅団は、空襲が激化する状況を受け、昭和20年3月27日に本部を伊良部国民学校から国仲美里～砂川に移している。これらの状況から、今回報告を行った国仲砂川の壕は、第59旅団との関連性が非常に高いといえる。

また、榴弾砲という観点からは、第59旅団隷下の部隊であった野戦重砲兵第1連隊第1大隊の第1中隊（以下、野重第1中隊）との関係性を考える必要がある。同隊は96式15糎榴弾砲を2門有していたと考えられる。野重第1中隊は、牧山陣地壕においても96式15糎榴弾砲を設置していたと考えられ、牧山と国仲砂川の両地域において96式15糎榴弾砲を設置したかについては、今後の検討を必要とするが、第12図にみられるように3つの壕内に96式15糎榴弾砲を格納することは可能であり、設置時における開脚した脚の形態がハの字形をなす点においても、壕の形態との整合性はとれるといえる。

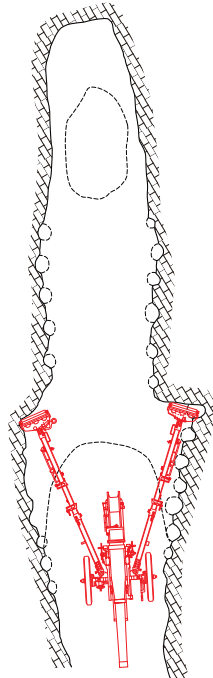
宮古島市内において、96式15糎榴弾砲が設置された壕として下里添の野戦重火器秘匿壕が報告されている（宮古島市教育委員会2016）。下里添の野戦重火器秘匿壕においては、脚を固定するための掘り込みが壁面部に確認され、柱は有しておらず、壕の形態的な特徴に相違がみられる。国仲砂川の壕が96式15糎榴弾砲を格納、設置していたかについては今後も検討を必要とする。なお、第59旅団歩兵大隊においては、41式山砲、94式37耗速射砲を、同砲兵隊は、迫撃砲を有していたことが確認できる（瀬名波1975）。

もう1基の壕2については、幅が1.0m、奥行き13.9mの直線的な壕である。この壕の用途としては、前述した3基の壕の構築などに従事した人員や、利用部隊の緊急避難が考えられる。

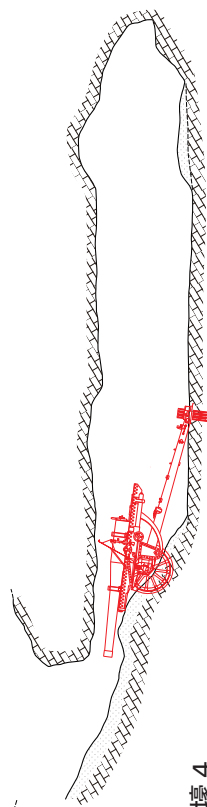
これらの状況から、国仲砂川の壕は、第59旅団に関連する壕であった可能性は非常に高く、伊良部地区内における旧日本軍の展開を考えるうえで重要な意味を有する壕である。伊良部地区における本格的な戦争遺跡の記録保存調査は、今回が初例となるが、近年の伊良部地区における開発工事の増加の傾向から、このような調査事例が増えることが推察され、伊良部地区における太平洋戦争時の状況を考える上で戦争遺跡の発掘調査の果たす役割は大きなものがあるといえる。



壕1



壕3



壕4



図版25 96式15榴弾砲 (西原町中央公民館展示)

第12図 壕1、3、4における96式15榴弾砲配置模式図

* 96式15榴弾砲の図は、佐山二郎2012年『日本陸軍の火砲 野戦重砲 騎砲 他』（潮書房光人社）に掲載された図をトレースし縮尺を合わせ作図した。

<参考文献>

- ・沖縄県教育委員会 1974 年『沖縄県史第 10 巻各論編 9 沖縄戦記録 2』
- ・瀬名波栄 1975 年『先島群島作戦（宮古篇）』 先島戦記刊行会
- ・伊良部村 1978 年『伊良部村史』
- ・宮古郷土史研究会 1995 年『宮古の戦跡をあるく』 麻姑山書房
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅴ）- 宮古諸島編 -』
- ・宮古島市教育委員会 2015 年『長南陣地壕・長南岩陰墓・地盛陣地壕・地盛南岩陰墓・村越陣地壕』
- ・宮古島市教育委員会 2016 年『綾道 - 戦争遺跡編 -』
- ・久貝弥嗣 2016 年「下里添の野戦重火器秘匿壕群・与那浜崎の砲台について」『会報』No.213 宮古郷土史研究会
- ・ref.C12122494800 一五. 沖縄方面部隊 (1)
- ・ref.C11110031400 第 28 師団戦史資料 (2)
- ・ref.C11110010000 野戦重砲兵第 1 連隊第 1 大隊戦史資料
- ・ref.C11110237800 山砲兵第 28 連隊戦史資料

報 告 書 抄 録

ふりがな	くになかうるかのごう							
書名	国仲砂川の壕							
副書名	南上原地区ほ場整備工事(H27-2)における発掘調査報告書							
巻次	－							
シリーズ名	宮古島市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	久貝弥嗣、山口直美							
編集機関	宮古島市教育委員会							
所在地	〒906－0103 沖縄県宮古島市城辺字福里600－1番地							
発行年月日	2017年2月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	調査原因
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		m ²	
国仲砂川の壕	沖縄県宮古島市伊良部字国仲			24° 48′ 16″	125° 16′ 45″	2016年8月8日～8月30日		記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国仲砂川の壕	壕	沖縄戦時	旧日本軍の壕(4基)		金属製品		本壕は、4基からなり、独立混成第59旅団に関連する壕と考えられる。3基の壕については、特徴的な形態をなして画一性があり、榴弾砲を設置することを目的として構築された壕であると考えられる。	

宮古島市文化財調査報告書第9集

国仲砂川の壕

－ 南上原地区ほ場整備工事（H27-2）における発掘調査報告書 －

発 行 年： 平成 29(2017) 年 2 月

発行・編集： 宮古島市教育委員会

〒 906-0103 沖縄県宮古島市城辺字福里 600-1

TEL：0980-77-4947 FAX：0980-77-4957

印 刷： シモジ印刷
